

## C-08 ICUにおける閉鎖式吸引(トラックケアTM)の導入に対する 啓蒙活動の一考察)

東北大学医学部附属病院 ICU

○平澤一恵、須東光江、若生美紀、及川千代、長谷川正志、星邦彦

### <目的>

閉鎖式吸引は開放式吸引に比べて、人工呼吸を中断させることなく吸引操作ができ、低酸素血症の予防、感染予防に有効であるという利点がある。

当院では、平成 13 年 6 月より閉鎖式吸引(トラックケアTM)を導入した。しかし、導入後も開放式吸引を行うことが多く、閉鎖式吸引が定着しなかった為、スタッフにアンケートを実施した。その結果、閉鎖式吸引はカテーテルがスリーブで覆われており分泌物の状況が判断しにくい、吸引感覚が得られない等と感じ、吸引が不十分であるという内容の回答が多く得られ、また、スタッフの手技・操作にも問題があると示唆された。そこで今回、パンフレットを作成し、模型を用いた学習の場を設けることで、閉鎖式吸引の実態がどう変化するかを調査すると共に、啓蒙活動についてを考察した。

### <研究方法>

対象：当院 ICU 看護師 28 名

・ 閉鎖式吸引に対するスタッフの考えや現状を把握する為、アンケート調査を行った。  
期間：平成 14 年 6 月 1 日～平成 14 年 6 月 15 日

・ アンケート結果を参考にし、閉鎖式吸引のパンフレットを作成すると共に、模型を用いた手技の練習の場を設けた。パンフレットには、「閉鎖式吸引の利点・特徴」を始め、我々が実態調査した「閉鎖式吸引と開放式吸引との吸引量の比較」のグラフ、「閉鎖式吸引の手技・操作のポイント」を写真で掲載した。

期間：平成 14 年 11 月 8 日～平成 14 年 11 月 29 日

・ パンフレットと模型による啓蒙活動を行った後、スタッフにアンケート調査を行った。アンケート結果から、スタッフの閉鎖式吸引に対する意識や吸引の現状を啓蒙活動前後で比較した。統計学的分析は、 $\chi^2$ 検定を用い、 $P<0.05$ で有意差ありとした。

期間：平成 14 年 12 月 11 日～平成 14 年 12 月 31 日

### <結果>

1. 「開放式吸引を行うことがあるか？」  
「ある」95%→43%、「ない」0%→57%
2. 「啓蒙活動後では、開放式吸引を行う頻度はどうなったか？」  
「減った」66%、「やや減った」30%
3. 「閉鎖式吸引と開放式吸引に差があると思うか？」  
「ある」100%→39%、「ない」0%→48%
4. 「閉鎖式吸引の手技・操作に自信があるか？」  
「まあまあある」59%→57%、「あまりない」36%→30%、「ある」5%→13%

### <考察>

啓蒙活動前に比べ啓蒙活動後では、開放式吸引を行うことがあると答えた群が有意に減少した。また、啓蒙活動後のアンケート結果では、開放式吸引を行う頻度が「減った」「やや減った」と答えた群が全体の 9 割以上を占め、閉鎖式吸引が定着したと裏付けられた。さらに、啓蒙活動後、閉鎖式吸引と開放式吸引の吸引量に差が「ある」と思う群は、有意に減少していた。吸引量に差がないことの実態調査結果をパンフレットにグラフで表示し、視覚で訴えたことが、スタッフの理解に繋がったと考える。さらに、当院での実態調査結果を表示したことが、現実味を増し、意識改革に有効であった。

閉鎖式吸引の手技への自信に関しては、全ての群間で有意な差はなかった。今回施行したパンフレットや模型による練習は、手技・操作の習得には不十分であったことが示唆される。これは、啓蒙活動を施行した期間が短かったこと、スタッフの自主性に任せた自習の場であり、手技の実演を行わなかったことが反省点である。今後、スタッフへの直接的な指導法を取り入れ、繰り返し啓蒙活動を進めていく必要がある。

### <結語>

1. パンフレットと模型を使用した啓蒙活動により、閉鎖式吸引が定着した。
2. パンフレットと模型を使用した啓蒙活動は、開放式吸引を行う頻度が減少し、閉鎖式吸引に対する意識改革には有効であった。